

## 故清原貞雄先生の思い出

立川輝信

私が先生を知った最初は先生の著書を通してであるが、始めてその聲咳に接したのはまだ郡制時代の昭和始であった。誰が主催であったか今は覚えていないが、当時の大分郡役所（現大分警察署の所）で先生の講演があった。私は明治五年頒布した大分市春日神社の氏子札一枚を持参して傍聴に行き、終了後それを直接贈呈した。当時先生は広島高師の教授で最も得意な時代であったと思う。その後先生は閑地につかれ、大分県史料刊行会が生れ、その顧問として県教育研究所内の事務所に出勤執務されていた。その際は幾度もお伺いしてご教示を乞うた。或る時先生が三正綜覧の筆写本を使用しているのを見て気の毒に思い、幸い私とその刊本を持っているが余り利用していないので先生におゆづりして活用してもらった。

大分合同新聞社主催の国東半島の学術調査があった時先生はその団長で調査員の席末に加はった私は期間中何に彼と指導啓蒙されたことが多かった。杵築八坂地区生葉寺大般若經の写経裏打に使用してあったものが得難い史料で、それを発見されたことには驚いた。

去る三十七年十月、私ども同志同攻の者が大分本好きの会を起し、その第一回を拙宅で催した。その際先生は小雨降る中にお出で下され「私の書いた本の思い出」と題してご発表、そして筆者の為に展覧の先生の著書十数冊に御署名、且つ色紙にもお書き下され、私にとってはよい記念であり思い出の種となっている。

私の蔵書中に祖師大乘院御真翰、大版倭漢朗詠集上下二巻がある。その下巻の巻末所載の文を次の如く先生は御解説下さっ

た。因に先生は大乗院の真筆内筆を御所持されているので比較鑑定された。

「延文元年七月廿日、佳々（人名）の為に手本に書き与うる所也。殊に刷筆の躰、聊爾す可らず、永く家宝として来葉に伝うべきのみ

（祖師大乗院、一品大王に贈る真翰也、ナマツシイニ愁スナツテ遺塵を慕く、忽スナツテ（廻の誤か）奥書を加えて証明す（又は奥書の証明を加う）為恐々々准三宮（満濟准后）」

「おちば」それは和半裁本三十葉の小本で、「明治四十二年二月二十日洛東下鴨寓居にて貞雄誌す」と巻頭自序の末に記してある。そしてその前に

かきすてし落葉を人の片身とて

ひろふ心は知る人ぞ知る

と貞雄先生の自作歌がある。本書は先生の岳父博見氏の遺歌集である。先生の叔父、国学者中野泰行先生の本書序文によると、清原博見氏は、故物集高世大人の門弟で、歌道を学び、後井上頼園につき十年間和漢の書を学び、その後は神仕えを続け、明治三十九年十一月一日、齡五十三で身まかった。

本書故貞雄先生のはしがきには、「指折りかぞふればはや二年あまりになりぬ、父の亡き骸を抱きて福岡なる大学病院より、故郷に帰りしより」と筆を起し、「頃しも秋の末つ方、隈なく照らす月影を踏んで、泣きくづれる母上を扶け、なげき心を取り失はんとするお妹をはげまして、来し方のありし面影をしのび、行末の心もとなさを思いつつ、父子の情愛をしのび、今はの情景を思ひ浮べ、高しとも高く、深しとも深き、岳父の温き御意を幻想し、あまりにもありし日の面影のなつかしさに、若き時より敷島の道を生まれ、折にふれ、興にまかせて詠み残されたものを、反古として失ふことを口惜とし、亡き父の片身にもならばと編輯し剝臍に附し岳父の親しかりし人々にひそかに頒ったもので、所謂流布本ではない。私は先生のこのはしが

きを読み、未だ年若き京都大学院時代の先生が岳父の死に対し、如何に対処したか、ご母堂、ご令妹に対する心づかい等、その時の先生のご心情を付度し、先生の横顔、御人物を描き、想像して、一段と敬服の念を深くしている次第である。

去る十二月六日、大分本好きの会第二十一回の例会は、故清原先生を偲ぶ会とし市内上野円寿寺で開催、秦円寿寺、植田靈山寺、長峰願成寺の三住職による供養を行い、秦住職の祭文、続いて筆者が本好きの会と列席者を代表して霊前に供養の辞を述べ、読経の裡に御令息宣雄氏以下参会者の焼香を終り、続いて大分合同新聞論説委員長嗣子清原宣雄氏の「吾が父を語る」のお話があり、来会者の故清原先生に就ての思い出話に花を咲かせた。そして展観の先生の著書凡そ二十冊と寺宝の吉文書其他数々の文化財を参観し、次の例会は宣雄氏の御自宅で開き、故先生の手拭本其他を拝親して先生を偲ぶことにして散会した。

有則隨有  
樂之無則  
任無累如

貞雄

(先生の原稿)



(円寿寺参会者)